

ハウンドキヤット

風紗わお

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新しいコンセプトの仮想現実体験ゲーム機、EGG-75。そのローンチタイトルとして発売された「ハウンドキャット」のβテスト員として咲口神菜の妹の椎那や幼馴染の上月俊一が選ばれる。2人がそれを始めた瞬間になぜか椎那が機械を残して姿を消してしまった。神菜と俊一は椎那が消えた謎を追うためハウンドキャットを起動するのだった

目次

チュートリアル編

01 探せ妹 | 1

02 学ベチュートリアル | 6

03 戦え初戦闘 | 11

『森の精霊』アニス・リアルローズ編

04 辿り着けアダラートの森

16

05 集めろ情報 | 21

06 追い払えゼストアーク団

25

07 知れ過去 | 33

08 殺せアニス・リアルローズ

39

09 開けセカンドゲート |

10 組めカンナ班 |

11 行けフェブリクの里 |

66

58

50

チユートリアル編

01 探せ妹

「特殊部隊ハウンドキャットへようこそ！」

黒い背景に浮かぶ猫のぬいぐるみが陽気に語る

「僕の名前はポチ！犬みたいでしょ」

ああ五月蠅い。これだからチユートリアルは飛ばしたいんだ

「ご存知の通り、数年前キャサリンって人がこの世界を襲ったんだ。おかげで街中壊滅状態さー！…そこで君ってわけ」

初耳ですが何か？猫に殺意を覚えたのは初めてかも

「君のそのアビリティでこの世界を救って欲しい！」

私が…咲口神菜が救いたいものは、世界なんかじゃない

「さあ…いよいよ君の冒険が始まるよ」

たった一人の妹なの

「ハウンドキャット?」

「勉強のイケメン君、上月俊一のベッドで横になってそのゲームの名を口にす

「ああ、ガイアス社の最新ゲームなんだ。今流行りのVRMMOってやつ」

「嬉嬉としてゲームを語る俊一。勉強の方は私がいないとダメなくせに、既にプロゲー

マへの道を歩みかけている。

「私もそのテスターなんだよ!」

妹の椎那。私より胸があり私より社会的。なんだろうこの敗北感。家事とかも全部
してくれるし…今のところ身長でしか勝ててない

「それじゃあ早速!」

「おう」

EGG-75という卵型の椅子のようなゲーム機に乗り専用のチップをはめ込み、二
人同時に叫ぶ。その姿はまるで兄妹のようで微笑ましい

……私が椎那の姉なだけで

『ハウンド・イン!』

椎那がEGG-75を残して消えた。……って消えた!?最近のゲームは体ごとゲー
ムの世界に行くの!?

「ちよつと、俊一！」

「んー？」

「椎那が…椎那が!!」

私の必死な呼び掛けに何かを察したらしい俊一が、EGG-75から降りてこちらを見る

「…おい神菜。椎那ちゃんは？」

「わかんない…それ付いたら消えちゃった…」

「とりあえず警察に搜索願を出そう」

「う、うん」

警察署で事情を説明して搜索願を提出。ゲームを起動したら消えていたなんてそんな使い古されたライトノベルの設定みたいなことが現実となっているわけで、色々と勘ぐられたりお巫山戯で通報するなど叱られた。こっちは大真面目なのに。まあ受理されただけマシかもしれないけど

家に帰って、コーヒーを飲んで落ち着こうとしても落ち着けなかった

なぜ椎那だけが。妹はどこへ行ったのか。どうやったら帰ってくるのか…：…思考だけがぐるぐると頭の中で暴れている

こんな日に限って俊一は忙しそうだし、両親は海外出張で家を空けてるしで私はただでさえ広いこの家をさらに広く感じていた

「あ、そうだ」

どうしてこんな簡単な検索方法を思いつかなかったんだ、私は！

携帯を取り出し俊一の番号を探す

「もしもし、俊一!今来れる!」

『いいけど、どうしたんだよ?』

「見つけたの!私達にしかできない椎那の検索方法を!」

「話を聞かせてくれ、神菜」

「まずは状況を整理しよ。VRMMOのハウンドキャットを起動させたら椎那が消えちやっただよね」

「ああ、簡単にいえばそうなるな」

「とんでもない考察だけど、椎那はゲームシステムに飲まれちやっただんじゃないかな」

「つまり、こういう事だな?」

『椎那を探すためにハウンドキャットをやるう』

「ハモったけど、そういうことだよ」

「そうと決まれば！」

「うん！」

『ハウンド・イン！』

02 学ベチュートリアル

「ゲームを開始する前にプレイヤー登録を行います」

無機質な女性の声。あまり好きじゃない

登録するって言っても名前とアバターだけ。名前は下の名前をカタカタにした「カナ」で、アバター……どうしよ

「最初から作ることもできますが、プレイヤーの姿を再現したものを作ることができます」

「いいじゃんそれ。あ、でもそのままだとつまんないし、ポニーテールに纏めて髪の色を緋色に、瞳を琥珀色に。うん、いいじゃん」

「新人エージェント、カナ。登録は正常に完了しました。心ゆくまでハウンドキャットをお楽しみください」

いへい

「特殊部隊ハウンドキャットへようこそ！」

黒い背景に浮かぶ猫のぬいぐるみが陽気に語る

「僕の名前はポチ！犬みたいでしょ」

ぬいぐるみだし表情が変わらないからわからないけど、ケラケラ笑うって事はそんなに気にしてないのかな

「ご存知の通り、数年前キャサリンって人がこの世界を襲ったんだ。おかげで街中壊滅状態さ……そこで君ってわけ」

ゲームのホームページには、プレイヤーであるハウンドキャットの新人エージェントは、10種類以上の『アビリティ』と呼ばれる特殊能力を持つ、ゲーム内の世界では世界に3割ほど存在する新型の人類らしい

「君のそのアビリティでこの世界を救って欲しい！」

だからこそプレイヤーは人類の希望のような存在になるのだろう。でも。

「さあ……いよいよ君の冒険が始まるよ」

——私が救いたいのは、たった一人の妹なの

「おっと、その前にキミについてももう少し知りたいな。君が希望するクラスと、所有してるアビリティを教えてくださいかい？」

クラス、というのはRPGでありがちな「戦士」「魔法使い」「僧侶」みたいなやつ。

ハウンドキャットに於いては、

近接戦闘が主体の「バーサク」

魔法や銃などの遠距離攻撃が主体の「トリガー」

攻撃技が少ない代わりにトラップ生成や回復といったサポート技が豊富な「ジャマー」の3つ。

私は前線で戦いたいからバーサクにしようかな

そうなるのであればティは相性が良さそうな『グロウ・ブースト』がいいと思う。三段階で怪力と音速を出す、シンプルな筋力増強タイプの能力だけど、二段階目以降は頭身が伸びるらしい。……おっぱいも大きくなるかな？

なんにせよようやくスタートするらしい。ポチが消え、画面が明るくなった

「よお、カンナ！」

幸先悪いな、私。いきなりチャラ男に絡まれた。頭上にコントローラーのマークと「阿修羅」って出てるから、そういう名前のプレイヤーなのだろう

「えっと、どなたですか？」

あ、ボーイチャ標準装備なんだ

「俺だよ、俺。上月俊一だよ」

「なんだ俊一か」

現実世界との差は……結構ある。茶髪の天パは青髪のツンツン頭に、瞳の色が一緒なのは少し腹が立つ。体格についてもちよつと小さくなった気がする

「二応チュートリアルが続きやつとくか？」

「うん、お願い」

「操作方法は至つてシンプル。動きたいように体を動かせばこの世界でも動ける。まあ多少のアシストは入るけどな」

EGG-75は従来のVRゲーム機のようなモーションセンサーによる画面の傾きや動きとコントローラーや指先のセンサーによる動きの読み取りではなく、脳が体に送る命令を読み取りその動きをゲームに反映する。だから従来品に比べ数倍のレスポンスとよりリアルな仮想現実体験をする試みを成功させた唯一のゲーム機だと言われている。噂では触感や匂い、温暖差までレスポンスするとか

「で、アビリティの発動条件だが、アビリティの名前を言えばいい」

「それだけ？」

「それだけ」

「グロウ・ブースト」

「おわ!？」

渾身の回し蹴りを避けられた。あっちのアシストが効いてるのかな

そしてわかりやすい変化。体が軽いし蒸気みたいなのが出てる。グロウ・ブーストが発動してるよーって合図だろうか

「何にせよこれで椎那を探せるね」

「ああ。そのためにもまずは——」

辺境の地、『オイラックス村』の探索から始めないと

03 戦え初戦闘

オイラックス村を回って早五日。何一つそれらしき有益な情報は得られなかった。それどころか他のプレイヤーすら出会わなかったのだけれど、βテストってこんなに過疎ってるものなの？

「あーいたいた！探したよー！あたし以外のプレイヤーー！」
「ん？」

黄緑のツーサイドアップをしたハツラツ系の女の子。私たちを見つけるや否や、笑顔でこちらへ走ってくる

「あたし、らぶしい！よろしくねカンナ、阿修羅！」

「うん、よろしくー」

思わずよろしくって言っちゃったけど、え、なに、らぶしいさんとスリーマンセル組むことになっちゃったのか？

「それより見て見て、これ！」

ポケットから取り出したのはどこで拾ったのかわからないガラスの破片。らぶしい

はそれを何の躊躇もなく手首にあてがった

「こうやってリストカットするとね、ほら、こんな風にぷくぷくってリアルな血の出方するんだ！」

「へえ、すごいな」

「阿修羅、危ない！グロウ・ブースト!!」

アビリティの力でらぶしいの腕をのぞき込んでいた阿修羅こと俊一を引き離す
小さな声で『ダーティ・コールド』と言っていたのを私は聞き逃さなかった。

「……邪魔しないでよ、カンナ。咲口神菜！」

傷口から氷の花が咲いていた。恐らくそういうアビリティなのだろう。それより何故彼女は私の本名を知ってるんだ？

「らぶしいとか言ったね。あなたは何者なの？」

「奥知美麻。アンタと同じ師恩高校の生徒会書記」

心当たり……どこの話じゃあない。私は以前彼女と殴り合いの喧嘩になって、奥知さんに勝ったことがある。さっきの奇襲はそれを根に持ったことだと思う

「バトルよ、カンナ。」

「待てよ、何も戦うことはねーだろ」

「阿修羅、下がって。どうせチームアップするなら実力は知っておいたほうがいい」

「足手纏いつて言いたいわけ？」

「そんなこと言つてない……!!」

腕の氷がなくなつてゐる。ということは、『次』がある

「阿修羅、作戦。血が飛んできたらあんたのアビリティで地面伝いで血を止めて。その隙にぶん殴る」

「了解」

俊一……じゃない、阿修羅のアビリティは触れたものに南京錠を付け時間を止める『ザ・ロック』だ。地面ごと時間停止させれば血が凍ることはないだろう

「敵前に作戦会議つて……余裕ね！」

予想通り血が飛んできた

「阿修羅！」

「遅せえよ！ダーティ・コールド！」

「なっ!？」

空中で血が氷に変形し、私めがけて飛んでくる。グロウ・ブーストを発動させ避けようとしたけど間に合わない！

「っち」

何発か掠つた。痛いじゃないかこの野郎……つてか痛みもフィードバックするのね

「ねえカンナ。いつ私が『なにかに付着しなきゃ凍らない』なんて言った？」

言われてみれば確かに

「ダーティ……コールドオオオオ!!」

飛来する血と氷を避けるので精一杯で近付けやしない。グロウ・ブーストの効果もそんなに残ってないし、拳句の果てに背中に民家、左は崖、右にはダーティ・コールドの氷柱……困ったな

「追い込んだよ？」

「追い込まれたのはお前だよ」

「いつの間に……」

「ジャマーのクラススキル、スニーキングさ」

音もなくらぶしいの背後にいた阿修羅。肩を叩き宣告

「ガ・ロック。あとは頼んだぜ、カンナ」

グロウ・ブーストの残り時間を全部使い切るくらい強く拳を握る。必殺技つぼく、こ

の撃に名前をつけよう

「ブーストカノン！」

魔屋の壁に、らぶしいが埋まった

??????????

「なるほど、妹さんがねー」

回復アイテムのお陰で擦り傷一つ残ってないらぶしいこと奥知美麻。彼女には事実を伝えてもいいだろう

「一応あたし生徒会役員だし、顔は広いからさ。こっちはこっちで探してみるよ」
心強い援軍つてレベルじゃない

「お、アンタらハウンドキャットのエージェントか？」

「え？あ、はい」

やっぱこんな片田舎だと黒スーツは目立ってしゃーないよね

「それならアダラートの森へ向かうとええぞ」

「アダラートの森？」

曰く、この辺で最も格式高い森。精霊が住んでいて、その精霊に会えると幸福が待っているらしい

初めての具体的な目的地ということで、阿修羅もらぶしいも反対しなかった

「そんじゃ、精霊さんに会いに行くか！」

「おー。ってなんで阿修羅が仕切るのさ」

『森の精霊』アニス・リアルローズ編

04 辿り着けアダラートの森

森へ向かうには乗馬するしかなく、近場で捕まえた馬に乗ることになった

「それにしても黒スーツで乗馬って何か変だよな」

「言わないでよ阿修羅。アンタまだマシじゃん。あたし達なんてスカートだよ？」

「らぶしいの言うとおり、上半身は男性アバターと同じだけど、女性アバターは黒のミニのプリーツスカート、レザー調のニーハイブーツっていう、制作陣の悪意伝わるコスチューム。阿修羅を先頭に三角形を描くように進んでいるのは、スカートが捲れて中身が見えないようにするためもある」

「ところで阿修羅、クラススキルってなに？カンナ知ってる？」

「ううん、知らない」

「説明しよう！クラススキルってのは自分の身体の何かを消すことなのだ！」

先の戦闘で例えると、阿修羅は気配を文字通り『消した』から、背後に周り込めたと
いうわけだ

「消せるって言っても何でも消せるわけじゃない。ジャマー、バーサク、トリガー……消

「せるものはそのクラスごとに決まってる」

「なるほど……覚えとこ」

「奥知さんとはあまり交流はないけど、意外としつかり者なのかな？」

「カイヤックス村から馬に乗ること20分。森の入り口に辿り着いた。立て看板には『この先徒歩厳守』と書かれており、かなり広い厩舎が設けられている」

「なんでこんなめんどくさいことを……」

「森の景色を楽しませるため……違うな、他の目的があるかも」

「例えば？」

「わかんないけど……森の景観の保全、とか？」

「おーい女性陣！置いてくぞー」

「あ、待って待って」

「舗道はないの？」

「あつたじゃん、らぶしい。……入ってすぐに」

「カンナ、それただの入口や」

「どう、入ってすぐの所には小休憩ができそうなスペースと舗道があった。でも、そこ

を過ぎるとあとは全部人の手の行き届いていない獣道で、安全な徒歩ルートを探すことすら困難だ

「あたしもうヘトヘトなんだけど……」

「どつかで休めねーかな……って、あれは池か？」

「二人共、静かに」

俊一が見つけた池、大きさ的には湖だけど、そこから一人の女性が現れた

羊の角のようなものが生え腰まである白く長い髪、吸い込まれそうなほど透き通った落ち着いた赤い瞳……アルビノって言うんだっけ。そしてその身に纏うローブのようなものさえ神々しく見える。間違いない、彼女こそが『精霊』だ

「突然失礼致します。……貴女が『精霊』ですか？」

精一杯、綺麗な言葉で対応する

「あら、カツツエ……じゃなくて、ポチの部下の方？」

「はい。私達三人がそうです」

「初めまして、私はアニス。アニス・リアルローズ。お察しの通り、『森の精霊』よ」

両手を広げ、子供みたいに無邪気に笑ったアニス。とても愛らしいと思った

「貴女達三名を歓迎するわ！ でも、お願いがあるの」

「お願い？」

「最近この森を狙わんとする山賊がいるの。彼らを追い払い、真の安寧をこの森に与えてほしいの」

「了解です」

振り返り阿修羅とらぶしいに目線を送る。同意はもらえた

詳しく話を聞くと、この泉の付近に山賊がアジトを構えていて、森林伐採などを誰の許可もなくやろうとしているとのこと。そいつらを懲らしめたらミツシヨンクリアってことだ

「私は奥にあるロッジにいるわ。貴女達も後で来てね」

「はい、ありがとうございます」

「……綺麗な人」

らぶしい……あんた完全に惚れちゃったね。まあそれ位魅力的な人だったのは否定しない

「さて、作戦だけどうしようか」

「正面突破しかないでしょ」

「わお」

大胆な人なのね、奥知さん

「阿修羅が時間を止めてる間にあたしとカンナでフルボッコ。これが理想」
実際あの氷結はかなりの脅威。私のグロウ・ブーストもちゃんと使えばかなり強いはず

といったところで一度終了。現実世界の時間がもう23時だったからね。

アダラートの森の保護。椎那の搜索と共に進めなきやいけないとなると、私は……私達はまだスタートラインにすら立っていなかったのかな
今はただ、襲い来る睡魔に囚われるとしよう

05 集めろ情報

生徒会室のドアをノックする。休日登校に加えてコレだ、慣れないことはしたくないね

「どなたー？」

「二年四組の咲口です」

「あ、神菜。おはよー。入って」

「失礼します」

部屋に入ると、奥知さんと俊一、生徒会長の殿村明里さんが既にいた。俊一の隣には見慣れない男子。

「初めまして、俺は嵐山匠真。椎那の彼氏だ」

えっ、あいつ彼氏いたの

「ついでに言う俺の親友な」

学年で言えば私だけ二年生で、皆三年生か。一応敬語解除の許可は貰っておいたけど、この面子なら正直要らなかつたかもね

「じゃあ改めて。咲口さんの妹、一年六組、咲口椎那さんが行方不明になった件について、情報共有をしましょう」

「まず、EGG-75っていうゲーム機でVRMMOのソフト、ハウンドキャットを起動させたら椎那ちゃんが消えた」

「警察は余りに非現実的すぎて捜索届を『形だけ』受理ただけで、動こうとしてない。私の親は海外だし、正直頼れない」

「で、ヒントがハウンドキャットにあると思ってプレイしてるんだよね」

「……随分と大胆な賭けに出たな」

「藁にもすがる思いってやつだね」

「ハウンドキャットのホームページのキャラクター紹介ページを印刷してきたわ」
なんでまた

「コラボ先や開発企業の社長なんかをモデリングしたキャラなんかもありがちだもんね」

「つまり、椎那がモデルになったキャラがいるかもしれないってこと？」

「なるほどな。でも見た感じ『椎那ちゃんに似てる』印象のキャラはいないぞ」

「だーよねー」

「いや美麻は椎那さん知らないでしょ」

「メインNPCで話進めてきてるけど、モブキャラだったら椎那を探すのはキツイな」
「そうだったらSNSパワーを頼るしかない」

まあそうかもしれないけどさ

「ところでこの『キャサリン』ってのは何かしら？」

「ラスボスだな。グラフィックはネタバレ防止で公開されてないみたいだが」

すごく嫌な予感がする。考えたくもない未来だ。

取り込まれた先がキャサリンなら、ストーリー上私達は椎那と戦うことになる

そうだったら私は誰と戦うことになるの？

「神菜？」

「大丈夫、ちよつと不安になっただけ」

「……次行くわね。現実での話よ」

会長の話を纏めるところなる。ここにいる5人以外、椎那が消えたことに関して騒ぎ立てるような様子は誰一人見られなかった。ここにはいないけど、椎那の親友、橋田みよちゃんできさえも心配するどころかまるで超絶他人事のような素振りだそうだ。

『椎那が行方不明になったのは事実だけど、荒立てて探すような事じゃない』というわけのわからない認識ってことは、現実世界では椎那を探すことは非常に困難だってことだよな

「とりあえずハウンドキャットをやつてない私と嵐山は聞きこみ調査を、美麻達はハウンドキャットでモデリングされたかもしれないキャラを探しましょう」

「キャラを？」

「性格、雰囲気、ルックス……なんでもいい。ゲームに取り込まれたつてことは『椎那つぼ』を感じるキャラがいると思うの」

「なるほど」

「それじゃあ今日の会合はここまで。みんな、頑張つて」

「収獲はほぼゼロ、か」

「ダラートの森最深部、ロツジにて情報を整理する」

「少なくともアニスが椎那ちゃんつてことはなさそうだね」

「そだね。でも、とりあえず今は——」

「ダラートの森保護計画に集中しないとね」

06 追い払えゼストアーク団

「来たよ、カンナ、阿修羅。構えて」

山賊、ゼストアーク団。街で聞き込みをした結果、そう名乗っていることが判明した
ん……あれはチエーンソーかな？

やばい

「阿修羅！」

「おう！出力最大、ザ・ロック！」

うーん、ちよつと距離があるな

「らぶしい、ちゃんと捕まってるね」

「は？」

「グロウ……ブースト！」

「きゃあああああ?!」

らぶしいをお姫様抱っこして一気に空中へ。木に引つ掛かったらしく、らぶしいの二腕に切り傷ができたけど寧ろ好都合

「らぶしい、エアキルできる?」

「なるほど。てやつ!」

激しく痛むだろうに、傷口を広げ、血液をゼストアーク団に付着させる。よし、上手くいった。着地と同時に叫べ!

「ダーティ・コールド!」

刹那に文字通り氷漬けになる団員たち。初戦闘の時、まともに喰らってたらと思うと正直ゾツとする

「く、こいつらアビリティ持ちかよ……!」

「違えよ馬鹿!この黒スーツ……間違いない、ハウンドキヤットだ!」

わーお図らずとも有名人だ、私達

「その通りだよ、あたし達ハウンドキヤットだよ」

言いつつ団員の1人に迫るらぶしいこと奥知美麻。こわっ

「あんたらこのままじゃ氷で身体が壊死しちゃう訳だけど、あたしだってハウンドキヤットの一人だからね。そんなことは極力避けたいな。そこで、ゼストアーク団の皆様は選択肢をあげましょう」

「選択肢?」

「このまま壊死するか、目的を教えて彼女に殴られてブタ箱行きか……賢い選択をして

欲しいな」

「ケツ、喋るかよ」

「そう。じゃあ死んで。ダーティ・コールド」

唯一出ていた顔を塞ぎ、全身氷漬けに。流石にこれでは生きていけないだろう。他の団員も同意見だったようでも同じ処置を施した。ああそうだ、らぶしいに回復薬使わないと

「……奇妙ね」

「何が？」

「呆気なさ過ぎない？」

言われてみれば確かに。名の知れた悪党集団だからプライドが高いのかと思っただけと違うな。これはどつちかというところ

「下っ端なんじゃないかな。目的も知らされず、とりあえず森を襲えとしか命令を受けていないとか」

「ふむふむ、それでそれでー？」

「っー」

背後を取られた!?

そこにいたのはサバゲーで見かける中途半端にミリタリーな感じの服を着た大男

「うちの組織、下っ端でもそこらの兵隊よりは鍛えてる筈なんだけどなー！ハウンドキヤットの新人に負けるなんざゼストアーク団の名折れってモンよ！」

「あ、アンタは……」

「俺かい!?俺の名前はズゴッグ!ズゴッグ・ゼストアーク!名前でわかると思うがゼストアーク団の団長さ!とここでお嬢ちゃん達……覚悟は出来てんだろうな?」

「覚悟?とつくに出来てるわ。アンタをぶちのめす覚悟がね」

「このクソアマ……!」

「冥土の土産つてことで聞きたいんだけど、アンタらの目的は何?」

「お嬢ちゃん達の冥土の土産かい?まあいい、俺らの狙いは森の精霊さ!」

「精霊を? 奴隷とか人身売買しようつての?」

なるほど、らぶしいは頭が良い。私たちに興味を引き付け阿修羅を近くまで誘導する作戦だね

「あ?お前知らねーのか!ガハハ!傑作だ!教えてやるよ。『森の精霊』アニス・リアルローズは……」キヤサリン」が従える幻獣、イフリートと人間のハーフなのさ」

えっ

「奴のツノを見ただろう!アレがその象徴さ!俺らゼストアーク団は奴の角と臓器を奪い取るのが目的なのさ!こんな風にな!」

メキツという音がして、ズゴグの近くまで来ていた阿修羅が吹き飛ばされた
「ガハッ」

「阿修羅！」

「ユーザーネーム『阿修羅』、次回ログインは翌日となります」

説明書通りだ……このゲームの仕様で、ライフがなくなったユーザーは翌日までログインできない。あの裏拳にそれほどの威力があるというの!?

「グロウ・ブースト！」

渾身の正拳突き。腕で防がれたけど少し時間を稼げる

「らぶしい、アニスに連絡を！私はこいつを森から出す！可能ならここで倒す！」

「うん、任せた！」

「行かせねーぞ！」

あのパンチを喰らったらひとたまりもない！足を引つ掛けて転がし、らぶしいの逃走に協力する

「あんたの相手は私だつての！」

「俺をこかすか！いいパワーだ！楽しもう！」

楽しめない！

2歩ほどバックステップし、反動を利用して強力なを一発叩き込む。わかってたけ

ど防がれたしカウンターでちよつと重い一撃をもらつた。仕方ない、私に出来るのは後はラツシユだけだ。つてかさすが大男、腕一本で凌ぐのか

「おおーいい攻撃だ！だが甘い！」

振り上げた左手を見て戦慄する。ただの拳なのに、とても重いハンマーにしか見えな
い。まともに食らつたら死ぬなこれ

なのに

「避けねえのか!?余裕なのか！凄いな！」

ふざけるな戦闘狂。そんなわけないでしょ。動けない。完全に足が竦んでる

こうげきをやめちやつた。あーあ、わたしもげーむおーぼーだ

その時、らぶしいから個人向けのボイスチャットで「バーサクのクラススキルで聴覚を消せ」と指示が入った。マジ危ねえ、思考を放棄してた

どうやって消すのかわからなかったけど、聴覚消えろつて念じたら無音になった。成
功だ

するとどうだろう。何故かズゴークが耳を抑え悶絶し始めた。これは絶好のチャンス。誰の仕業か分らないけど、彼が耳から手を離せば耳からのダメージを塞げないだろう。つまり、ガードが崩れているつてことだね。それなら分かりやすい。私がするこ
とは一つだ。らぶしいも文字チャでそう言ってる

「ブーストカノン!!」

ありったけの怒りと、グロウ・ブーストの残り時間の全てを込めた拳が、ゼストアークの団長の眉間をしつかりと射抜いた

「ごめんねー!事情説明できなくて」

ズゴッグの身柄を警察に引渡し、再びロτζジ。日付も変わったし阿修羅もいる。アニスは戦闘があつた場所で森の被害を確認してる

因みに聴覚を消せと指示したのはアニスで、彼女が持つ音を反響させるアビリティ、『ビート・ビート・ビート』に私を巻き込まないためだった

「何にせよミツシヨンクリアだな。俺がいない間に!」

「ごめんごめんって」

話し合いの結果、残党狩りを兼ねてしばらくアダラートの森に滞在することに。ズゴッグの逮捕を受けてなお、命令に従うお馬鹿さんがいるかもしれないからね

「それが終わり次第、椎那ちゃんの捜索!頑張ろうね」

「おう」

「そだね。…あ、回復薬もらつていい?」

残りライフ、一桁だった。危ない危ない

「皆さんお疲れ様、そしてありがとうございます。被害は最小に抑えられてたわ！」

嬉しそうにびよんびよん跳ねるアニス。かわいいですね！

「今日は腕によりをかけてご馳走を作るわね！」

残党狩りとかで忙しくなる前の平和な時間。今だけは、それに甘えちやつてもいいよね？

07 知れ過去

「さんびやく……ん！」

残党狩りは実に一週間に及んだ。事前に仕入れた情報が正しければ305人いるはずなのでこれで終わりだ。報告を兼ねてロッジへ行こう

「皆さんお疲れ様でした」

ハーブティーを飲みながら談話する。こういう時間、嫌いじゃないよ

「てかアニスもさ、あんな強いアビリティ持ってたったら協力してくれても良かったのに」

「ごめんなさい、それは出来ないわ」

「何故？」

「貴方達エージエントを含む、アビリティの使用を許可された人以外が保護観察者の許可なくアビリティを使うことは、本来法律で固く禁じられていることなの。私もホントは罰せられるはずだったんだけど、森の保護って大義名分のおかげでお咎めなしっ！」

バチコン★って効果音が聞こえてきそうなウインクね

「なるほど……ねえアニス、ひとつ聞いていいかな」

「なあに、カンナ？」

「貴女は幻獣イフリートと人間のハーフって本当なの？」

ずっと引つかかっていた

「それも”キャサリン”の支配下にイフリートはいる」

いろんなゲームで炎の化け物として扱われるイフリート。このゲームでもそうだとしたら

「ねえアニス、貴女は”何者?”」

アニスが味方なのか、もう分からなくなっていた

「全部話すわ。でも一度しか言わない。ちゃんと聞いてね」

それから21年前、ホスレノールっていう山間の村に大災害が起きた。その村は活火山の途中に立地した村だったから、山の地表が薄くなっていたところからマグマが流れ出て村に流れてきた、といったところかな。

人々はそれを古くから伝わる”幻獣”の怒りだと信じ疑わなかった。よくあることよね、言い伝えは本当だったってやつ。ホスレノール村もそうだった。

——”操炎の幻獣”イフリートが現れたの

イフリートは言った。『我が力を継承する人間が欲しい。その人間を授かる器を寄越せ』と。

簡単に言い換えれば自分に見合う嫁を寄越せってことね

そこで、リジア・スタリウムと名乗る村一番の美女が標的になった。リジアには当時存在が認知されたばかりの『アビリテイ』を有していたから、余計にね

うん、リジア・スタリウムは私の後のお母さんよ

イフリートはリジアを大層気に入って彼女を連れ去り村に平和が訪れた

一方のリジア。連れ去られた翌年、イフリートとの間に赤子を授かるの。それが私——と言いたいところだけ違いわ。男の子だったのだけれど、完全に普通の人間だった上に虚弱体質で、生後数ヶ月で命を落としたの

そして亡き兄を産んだ翌年に産まれた第二子が私。産声をあげた時にトウシキミの実：スターアニスに似た炎を吐いたことから、アニスフレアの名前を付けた。

言ってしまうわ。私の本名はアニスフレア・スタリウム。手から生成されるマグマを炎に変換する、”操炎”の力を幻獣から受け継ぐ者

アニス・リアルローズはアダラートの森に来てからの名前よ

……本題に戻るわね。私の生誕は両親の明暗を分けた。イフリートはツノと炎の産声に狂喜乱舞し、リジアは自分が人外を産んでしまったその事実で自分に絶望した。

父は人間の姿を模倣し、母と私を連れてオイラックス村に移住。その五年後、段々イフリートに似ていく私をリジアは教会に捨て、自殺した。イフリートが私を捨てたことに立腹して殺した説も否めないわ

不思議なことに、教会では私を疑う人はいなかったわ。何なら天使だと言ってくれる人もいたわ

そして”キャサリン”襲来の日、私は14歳の誕生日。今まで育ててくれたシスターは今までのことを全て私に話し、私をアダラートの森へ送り届け、私の目の前で殺された。

私の父 ”操炎の幻獣”イフリートにね

このロツジの裏に小さなお墓があるでしょ？それはそのシスターのお墓なの

……私は父を恨まなかった。なぜならその時既に”キャサリン”に操られていると気付いてしまったから

その後、私はアビリティを所有している事を偶然知った。『ビート・ビート・ビート』よ。炎と一切関係ないこの能力。私は両親のことを一度忘れ、操炎の能力を封印した

「アニスフレア・スタリウムはこの時死んだの

アニス・リアルローズ。森を護る精霊の誕生を祝福するようにね

「操炎の半幻獣」 アニスフレア・スタリウム。それが私の正体。ご清聴ありがとう、お話を終わりよ」

誰も、開口できなかつた。私たちにはアニスの境遇を慮ることすら出来ない

でも、だからこそ言えることがある。それを言ったのは阿修羅。私も、きつとらぶしいも同意見

「……俺たちにアニスの話に感想を言うことはできないけど、これだけは信じてくれ。少なくともここにいる三人は『アニス・リアルローズ』のことが大好きだ。俺たちに出ることなら何でもするさ」

「だから頼む。俺らハウンドキャットを頼つてくれよな——仲間だろ、俺達」

「……うん！」

アニスのことを知った今、彼女を放っておけないからね。私達にはアニスを護る責任がある。椎那を取り戻すのと並べるのはアレな気がするけど、それ位大切なことだ

で。強い絆が結ばれたから、後に私は後悔するのだけれど、それはまた別のお話这件事情

08 殺せアニス・リアルローズ

「おおーさすがハウンドキャット！噂以上の活躍だぜ」

アニスに買い出しを頼まれオイラックス村。こつちでも悪党を懲らしめることになるなんて思いもしなかった

らぶしいこと奥知美麻の推測によると、この前私達が討伐したゼストアーク団は村を裏で仕切っていて、ある意味で抑止力になっていた。その籠が外れたから小悪党が増えたのではないか、とのことだ

なるほどと思う反面それだけなのかなあと思うのも事実なわけで。例えば私達がアダラートの森に行ったから監視の目がなくなったとか。

「ねーカンナ、今日多くない？」

隣で氷結しまくってるらぶしいが言う

「そーいやザコ増量キャンペーンとかホームページに載ってたような」

ぶん殴りながら私も返す。あ、こいつ首折れたな

「お前ら、ペース落としてくれてもいいいんだぜ？」

時間を止めて確実に縛り上げる阿修羅

何も知らない人が見たら相当な地獄絵図だよ、これ

……ペース落とせ、ね。無理だよ

ゲーム上の日付で今日、5月3日はアニスの誕生日。4人で祝うって決めてんだ。なんとか時間までに片付けないと

そのとき、ボコンという音が遠くから聞こえた。方角でいえば村から南西に位置するアダラートの森

アダラートの森!?

「らぶしい、阿修羅!」

森へは消防団が既に駆け付けつつある。悪党共は近くにいた警察に任せて私達もそれに続く。馬での移動にも慣れたものだ

道中、森がチラチラ視界に入る。やっぱり燃えてやがる

「君たちどこへ行くんだ!」

「アダラートの森です! アンタたちも一緒にしょ?」

それを聞くと血相を変えた

「駄目だ! 君達に何が出来る!?! 見た所、まだ未成年だろう!」

「トシでモノを語んな! 俺達の服を見ろ! 俺達はハウンドキャットのエージェントだ

！」

特殊部隊「ハウンドキャット」

その存在意義は平和を守ること。森を守るということはつまり平和を守ることになる

「森にはアニスが、『森の精霊』が取り残されてる筈なんです。アニスを助けさせてください」

「……分かった。死ぬなよ」

大袈裟に言うハウンドキャットの行動を否定することは、平和への妨げになる。だから消防団は私たちの意思を尊重せざるを得ない。ざまみろ

森へ着く頃には山火事に拍車がかかったような感じで森全体が炎に覆われていた

「俺達は消火活動に専念する。エージェント諸君は……って、あれ？」

二人とも早い。弱めとはいえグロウ・ブリストかけてるのに、それに追いつけるんだもん。それだけアニスのことが心配なんだね

そしてロツジ。既に燃え尽き、中に誰もいなかった。無論、アニスの痕跡もどこにもない

「アニスどこ……?」

「何はなくとも鎮火しようぜ」

「うん。らぶしいは湖凍らせて。で、阿修羅はその氷の時間を止めてちょうだい」

「おめーは何すんだ？」

「その状態で弱めブースト・カノンを連打する。そうすれば氷が爆発、熱で氷が溶けて簡易的な冷水シャワーができるはず」

「カノンはこういう時のカンの鋭さは恐ろしいね。敵に回したくないや」

「褒め言葉として受け取っておこう。結果的に作戦は大成功で、およそ半分は鎮火できた。残り半分は消防団の手柄。さすがだね」

「気になるのはアニスのこと。どれだけ森の中を捜しても見つからない」

「早めに避難……したんだよね……？」

「数日後、ゲーム内で新聞が号外として配られた」

『森の精霊、アニス・リアルローズは炎を操れる。そしてその炎でアダラートの森を燃やし尽くした』

『そして明日、アニスは極刑に処されると書かれていた』

『そんなはずがない！森を愛し、共に過ごした彼女がそんなことする筈がない！』

『情報の出処を突き止め、なんとかアニスが捕えられている独房へと辿り着き、面会へと漕ぎ着けた。たった数日とはいえ酷い拷問を受けていたようで、身体中に痣や蚯蚓脹』

れができ、あの美しかったローブも埃まみれになっていた

「ごめんなさい、カンナ。出来ることなら貴女達を巻き込みたくなかった」

そういう彼女は、不謹慎極まりないけど、普段より数倍美しく見えた

「何があつたの？」

「分からないわ。気付いたら森が燃えていて、捕えられていたの。でも、私じゃない。それだけは自信を持って言えるわ」

「それはなぜ？」

「操炎”を発動すると、右手の甲に少なくとも一週間消えない火のような模様が浮かび上がるの。でも今の私にそれはない。ほら！」

病的に痩せこけたその手には、”操炎”の刻印はなかった。しかし。

「おエライさんがそれを信じるかどうかは別……ってわけか」

「ええ、そうよ。だから疑われても仕方ないわね。『炎を操るアビリティ』なんて存在しないのだから」

そんな会話をしていると、私達と同じ黒スーツの男が、ハウンドキャットのエージェントらしき男性が現れた

「突然の訪問失礼。諸君をハウンドキャット新人エージェントとお見受け致します」

「そうですけど、あなたは？」

「ハウンドキャット幹部、エデン・トラゲオルと申します。簡単に言えば貴女方の上司です
すね」

「そんな人が、何故ここに？」

「らぶしいの疑問は私もすぐ感じたことだ

「率直に申し上げます。カンナ、貴女にアニスフレア・スタリアムの斬首をお願いしたい」

「は？」

「は？」

「断つても構いません。代わりはいくらでもいます。ただし、その場合は貴女にはハウ
ンドキャットを降りてもらいます」

「……………やります」

『カンナ!?!』

「こうなることは全然予想できてなかった

でも、ここでハウンドキャットを辞めることになったら椎那は絶対帰ってこない気が

す
る

それに、見ず知らずの人に処刑されるくらいなら、見知った人に……いや、冷静に考えたらそれも酷な話だね

でも、私の決意は固い。私がやらないと駄目なんだから

「これより、『森の精霊』アニス・リアルローズ……いや、”半幻獣”アニスフレア・スタリアムの処刑を開始する！」

「同祭だろうか、髭面のジジイが高らかに宣言する。気色悪い

私とアニスは少し奥まった位置に控えている。最大限の配慮を頂いてほんの少し談話する時間をもらった

「カンナ、私と出会ってくれてありがとう」

「それはこつちのセリフだよアニス。貴女と過ごせた時間は私達にとって宝物だから」「そう言つて貰えると嬉しいわ。本当にありがとう」

「……これなんて無限ループ？」

「ふふ、確かに。……あ、そうだ」

「なに、アニス？」

いきなり私にベーゼを。ほっぺだからのーかん！つてオイオイいやいや何してんの
!?

「貴女に”操炎”の力を引き継がせたわ。この件のほとぼりが冷めてから使つてね」
「えっ」

「使う時は簡単。その手に炎を纏うイメージをすれば使えるわ」

「待つて、アニス」

「被処刑人アニスフレア・スタリアム！並びに処刑人『ハウンドキャット』エージエント、
カンナ！入場せよ！」

「行きましよう、カンナ」

アニスには聞きたいことが沢山あるのに

「この剣は選ばれし者にしか扱えぬ、邪悪なる者のみ斬ることが出来る神聖なものだ」

ご丁寧に絹の布で包まれた剣を鞘から抜く。なんだこれ、軽い。神聖なんて嘘っぱちだ。こんな剣で、私が、アニスを？

ふと見ると処刑台の麓には許可を得て来ている見物者と野次馬が沢山。阿修羅はいるけどらぶしいはいない。そりやそうだ、特に私とらぶしいは親しく接してきたから、そんな人が死ぬところは見たくないだろう。できることなら私だってアニスの身の潔白を証明して処刑なんかしたくない

さよなら、アニス

バスデーパーティ、やりたかったなあ

「サツって音。私の眼前には白くて長い髪の毛がついたサムシングと、首から上がない体。私の手には赤いモノが付いたナニカ。耳を劈く歓声と拍手

ああ、私はアニスを殺してしまったのか

脱力感と激しい動悸が私を襲い、意識を失った

「神菜！大丈夫!?!」

「……美麻?」

「……美麻だよ！良かった、上月呼んでくる!」

よく見ると、ここはどうやら私の部屋で、ベッドに寝かされているようだ

……よく現実世界に戻ってこれたな

俊一の話によると、ハウンドキャットの私は斬首のあとフラフラと控え室に戻り、ソファで眠りについた。そこで自動セーブとなり現実へ戻ってきたとのこと。

つまり、次回起動時はアニスがいない世界で、アニスが持ってた幻獣の力を引き継いでプレイすることになる

ゲーム的には進歩したのだけれど、なんかもやもやする
この蟠りを胸に、翌日私はハウンドキヤットを起動するのだった

09 開けセカンドゲート

突然だけど、ステイルルチャレンジって知ってる？

日本ではエアソフトガン、アメリカなどでは実銃を使用する、用意された的全てを撃ち抜く『スピード・シューティング』という競技で、中でも鉄製の的を射抜くのがステイルルチャレンジって言うらしい。間違ってたらごめん

ここはラタノプロストという商業地区に位置する、ハウンドキャットの本拠地

なぜそこにいるのかって？簡単な話だ。私はアダラートの森を全焼させた重罪人である。半幻獣、アニスフレア・スタリアムを処刑した。その功績が認められ近い内に幹部に昇格するからだ

『近い内』と暈したのにも理由がある。グロウブーストを所有するエージェントが幹部に昇格する際、どうやら第二段階『セカンドゲート』に到達していなければならぬらしい

え？……ああ、ステイルルチャレンジの話ね。ざっくり言えばグロウ・ブーストをこき使うことで、セカンドゲートに到達しようって試み。そのためにはターゲットが必要

だけど、そんなに用意できないから鉄板五枚を使おうってことになった。そこで回転率がいいステイルルチャレンジを模した特訓をしてるってわけ

今やってるのはラウンドアバウト。向かって右2枚を外側から、左2枚を内側から、最後に中心の的を狙う。中心の的を最後に狙うのはルールだからとしか言いようがない

「ねえ阿修羅、最近カンナ変わったよね」

「そうか？」

「アニスを…アニスフレアを殺してから、鬼気迫る雰囲気を感じる」

「……咲口神菜、その本質は変わってねえよ。」

「外野2人、うっさい」

『誰が外野だ?!』

「あはは、ごめんごめん。まだ特訓するから適当にラタノプロストで買い物してて」

「な？何も変わってないだろ」

「……うん」

グロウ・ブーストを酷使してきた結果、分かったことがいくつもある。第一段階：ファーストバウトの時点で通常のものと同様のものと弱めのものとの二段階に切り替えが可能という

こと。これはアダラートの森に行く時やってたね。

もう一つはグロウ・ブーストは血液のように体内を常に循環しているということ。それはつまり意識的に腕だけや脚だけに発現できる。すごい。局部発現の場合、威力が桁外れに上がることも分かった

……こういう風に1人でいるとき、アニスの顔が浮かぶのは何故だろう。私の中で彼女が大きくなりすぎたのかな

「ふふっ カンナ、聞こえる？」

え？

「たった2時間でもう鉄板がベコベコ…頑張ってたんだね」

まるで白銀リリイを演じてる時の上田麗奈さんのような綺麗な声の持ち主は、まさか！

「そのまさか。アニスよ。貴女の心に直接語りかけているわ」

そんなゲームみたいなの……ってこれゲームだった。それにしてもどうやって？ アニスは死んだはずじゃ…

「操炎」に残った私の面影……かな？ まあ貴女に伝えたいことを伝えたら私は消えると思うわ」

ずっと一緒にいれるわけがないのは分かってたよ

それでも、やっぱり悲しい

「……聞いて、カンナ。セカンドゲートに到達するには強い気持ちが必要よ。それ以外の条件は満たしてる」

今更どんな気持ちを持ってというの？アニスを殺した時、このゲームに対する感情が怒りと虚しさ、あとは罪悪感くらいしか残ってないというのに

「ふふ、それなら尚のこと。貴女はキャサリンを倒す以外にも目的があるって教えてくれたでしょう？それを強く念じればいいわ」

なんだ、そんなことでよかったのか

「やっと、笑ったね。ずっと難しい顔してたわよ？」

そうかもね

「さよなら、カンナ。幹部昇格おめでとう」

さよなら、アニス。ありがとね。それと、誕生日おめでとうございました

殴りすぎてボウルみたいになった鉄板を裏返しにしてセットし直す。5メートルほど距離を取り、椎那のことを強く念じる。

待ってて、椎那。お姉ちゃんが救ってあげるから

「グロウ・ブースト……セカンドゲート！」

刹那。視界がホワイトアウトした。

交通事故でありがちなほんの一瞬の出来事なのに、スローモーションで動く感じの中、その白い世界で私はアニスにハグされた

数回瞬きし、体が軽いのに気付くけどそれはグロウ・ブーストの影響だと思った。ファーストバウトでも似た感じになるからね。だけどいつもより目線が高かったりとセカンドゲート、漸く到達だ

「行くよ、アニス」

地面を蹴ったと思ったのが目の前に。これならとステイルチャレンジのラウンドアバウトのルールで的を殴る。うん、ファーストバウトの数倍以上の力が出せてるのが実感できる

「ただいまカンナ、さっきの爆発音何？ってアニス!?!」

「は？何言ってるの阿修羅ってホントにアニスじゃん!」

「いや私カンナだけど。咲口神菜。セカンドゲート到達したんだよ」

「え、マジ？おめつとさん!」

「ホントおめでどうカンナ!あ、ほらほら、鏡みて!アニスそっくりなの!」

施設の姿見に映る私はアニスそっくりだった。違いはと言えば髪をポニーテールにしていること、目がアニスより猫目がちなこと、そして黒スーツ。身長やボディラインも少し違うかな。服もそれに合わせてサイズ変更が成されている

「セカンドゲート到達、おめでとうございます」

嫌味な声。私は覚えてるぞ、エデン・トラゲオル。とかどこから来たてめえ

「カンナ、貴女を正式にハウンドキャット幹部として認定します。認定式の会場へ案内します。同行者のお二人もどうぞ」

認定式は小さな会議室で行われるらしい。私達カンナ班とエデンの他に、猫のぬいぐるみが置いてある

「これよりエージェント、カンナの幹部認定式を執り行います」

エデンが司会なのか

「まず、カンナには『通り名』を決めてもらいます。少なくとも幹部の間ではそれで呼ぶ合うことになります。……ああ、私は『アルターエゴ』ですよ」

半幻獣、森の精霊……アニスにはその通り名があった。まあ前者は種族名だし後者は自称だから、ハウンドキャットのそれとは違うか

私がそれを付けるとしたら、何が相応しいだろう。ゲーム内の世間的には『アニス殺し』『半幻獣殺し』なんかがいいのかも知れないけど、私はその力を受け継いでるか
らなあ

あ、そうだ

「私の通り名は、『ヘステイア』にします」

「ねえ阿修羅、ヘステイアって知ってる？」

「ギリシヤ神話の『炉の女神』だったはず。ゲームとかじゃ炎の神様って扱が多いな」
「ヘステイア、ですか。由来を教えてくださいませんか」

「——私はアニスフレア・スタリアムが持つ”操炎”を受け継ぎました。彼女の罪を背負い、この力を使い民を守ることアニスが果たせなかつた贖罪を代行しようと決意したからです」

「こう言つとけば納得するでしょ。私がこう口述した手前、罰するに罰せない……と思
う」

「アニスの力を受け継いだことは阿修羅……俊一達には伝えてなかつたな、そういや
何故セカンドゲートの姿がアニスに似ているのかつてところには納得してもらえ
たはず。唾然としてるけど。」

「おっと、私の口上はまだ終わってないぜ。止めの一発だ」

「私達カンナ班とアニスは、仲間だったから。私からは以上です」

「流石に少しやな顔された。でもまあ昇格自体はめでたい事だから水に流して頂戴な」

「その後認定式が終わつたところで自動セーブ。そのタイミニングで一度ハウンド
キヤットを終わるとちようど18時だった」

「ねー俊一、今日そつちで食べていい？」

「あ、それなら奥知も呼んで大鍋カレーにしようぜ」

「いいねいいね。じゃ俊一のパパと美麻に電話するね」

「さんきゅ。台所使うぞ」

「ご自由にどうぞー」

ゲームの中の私は順調に凄い人生を歩んでるけど、現実の私は妹が行方不明ってことを除けば至って普通のどこにでもいる女子高校生だ。ハウンドキャットをやってない会長たちと連携して椎那を探さなきゃね

10 組めカンナ班

「いたああああああああああ!!」

「ん？」

「くたばれカンナさん！プレシヤス・ラックー！」

ああ、たまにいる戦闘狂か。いいよ相手したげる

「グロウ・ブースト……セカンドゲート」

……あれ？ファーストバウトにしなければならない

「氣いつけるカンナ、プレシヤス・ラックは不幸を相手に押し付けて幸運を呼び寄せるア
ビリテイだ」

あ、そういうタイプですか。なるほどなるほど
起訴

バク転で着地点から回避。地面はクモの巣状にヒビが入った。まともに食らって
たらゲームオーバー不可避だぞこれ

「避けられた！カンナさん『幸運』なのですね！」

否定はしない

改めて相手を見る。黒スーツを着ていることからエージェント、つまりプレイヤーであることは確定だ

ただ、私に突つかかってくる理由がない。あ、でももしかしたらアニス絡みか？

「あんた何者？別に恨み買うようなことしてないと思ってるんだけど」

「恨みはないのですよ？なんか強いってネットで評判だから手合わせしたいだけなのです！」

あ、やっぱりただの戦闘狂か。仕方ない、本気出す

注意深く観察すると彼女の左手首に数字が刻印された歯車が三つついている。恐らくその組み合わせで運を操っているのだろう。そうになると777になったときが一番警戒すべきかな？

とりあえず近付けたくない

「プレシヤス・ラック！」

「力を貸して、アニス。」操炎！

手を翳して、掌に炎を纏うイメージ。お、うまく出てきた

でも、直接当てないよ。あくまで牽制。動きを封じてブーストカノンが理想的なんだけど、どうだろう

ん？ 炎の動きが変だ……違うこれ逆風!?

「ふっふっふ！運は私に味方していりゆのです！」

囁んだ

「囁んだ」

「囁んだね」

「う、うるさいのです！スペクターは黙ってるのです！」

「ひっでえ」

その油断が命取りだよ、小さな戦闘狂。回し蹴りがこめかみを捉える

「油断大敵なのですよ、カンナさん。床下注意なのです」

あ。ここさつき割ってたときだ

地面が割れるけど片足で立ってるから踏ん張りが効かない。しかも沈む。やばい、ピンチだ

逆境を跳ね返してこそそのハウンドキャット幹部。チャンスを作らなきゃ

「セカンドゲート！」

よし。そこで次だ。名も知らぬ戦闘狂の足首を掴んでこっちに引きずり込む！

「うおおお！」

地面に思い切りビターンって叩き付けて反動によるエネルギーと風圧を得ることで

浮力にして飛ぶ。ここまで上手くいくなんてね！幸運だね！

らぶしいの手を借りて安全圏に着地。さてあの子は？

「う、ぐぐぐ」

何となく分かってたけどフィードバックで私に押し付けてきた分の不運が彼女を襲って動けなくなってるね

ファーストバウト状態ならまだ保てるかな。よし

「チエックメイトだよ、お嬢さん」

地面に埋まった彼女に炎の拳をちらつかせる

「っー」

「動かないで。怪しい動きをしたと判断したら即殴るから」

我ながら小悪党みたいなセリフ。まあぶっちゃけると椎那の捜索に行き詰まってイライラしてたのもあるけど

「敗北を？」

「……認めるのです。参りましたなのです」

何はともあれ、事情聴取しなきゃだよ

「プロゲーマーのさあやです。よろしくなのです」

「さ、さあやさんだとお!!?俺ファンなんです!サインしてください!握手もお願いします!す!うっひよおおお!!」

「阿修羅?戻ってきて?」

阿修羅曰く、さあやは現役女子高生のプロゲーマーで、数々のFPSゲームの世界大会で入賞している実力派だそう。因みに本名は音無紗綾らしい。

「で、さあやさん。何でカンナを襲ったの?」

「さっき言ったとおり、カンナさんは強いって聞いたから手合わせがしたかったです」
「それだけ?」

炎の拳を近付ける。あ、これ楽しい

「ひいつ!?あ、あと私が所属する株式会社ゲームプラにスカウトしよかなと」

わお。でも、ダメだ

「それはできない。私は妹を救いたい。少なくともそれが叶うまではプロゲーマーになろうとは思わない」

「妹?」

「えつとね、実は——」

いままでのあらすじ。妹がゲーム起動したら消えたからそのゲームをプレイして手掛かりを探そう!……って感じです、はい

「さあやさんはどんな反応を示すだろう？ やっぱり警察や他の生徒みたいな感じかな？」

「私も一緒に探したいのです」

え？

「だっておかしいのです！ 警察や友達が全然動かないなんて！」

「そういえばそうだ。普通すぎて見落としてたわ」

「会長や椎那の彼氏が現実世界で探してくれてるとはいえ、そっちは望みが薄いからなあ」

「一緒に探すことはチームアップするってこと？」

「なのです！ もちろん幹部のカンナさんが旗印なのです！ あと私のことは呼び捨てでOKなのです！」

「あ、私なんだ。まあさあやに幹部の証である肩章がないってことは、幹部は私だけなのか。そりゃ私が旗印になっちゃうね」

「カンナ班、結成だね。目標はキャサリン討伐と椎那の救助。頑張ろうね」

『おー！』

「結成おめでとうございます」

「誰なのです!？」

「落ち着いて、さあや。私たちの上司、エデンさんだよ」

「つとにどこでも湧くねアンタ。ストーキングでもしてるの?」

「いえ、本部からの命令で近くのワープゲートに來ただけですよ——ああ、アニスフレア氏の時は偶然でした。他の幹部が担当だったのですが、風邪をひきましてね」

「アニスを私に殺させたのは?」

「貴女達の誰かなら誰でも良かったのです。幹部が一人亡くなりました。新人に手柄を立てて貰い、昇格を認定させるためにあの日私はいたのです」

ああ、代わりならいくらでもいるつてのはプレイヤーのことだったのか。今なら理解できる

「さて、本題です。貴女達カンナ班をハウンドキャットの第39番正式部隊として認可します。それに伴い任務を複数出します」

任務?

「まず、キャサリン討伐。あとベルゼブブの討伐、フェブリクの里の調査ですね。それともう一つ」

「何なのですか?」

「アビリティを与えると噂される、『白い妖精』に最低でも一人、出会って頂きたいのです」

……なにそれ？

1 1 行けフェブリクの里

「1度情報を整理するのです」

ハウンドキャット本部、会議室

「俺らカンナ班に関わらず、目的は“怨恨のキャサリン”を討伐することだ」

「そして私達のミツシヨンはフェブリクの里を調査すること、ベルゼブブの討伐、白い妖精に出会うこと。そして椎那ちゃんを救出すること」

「やるのがたくさんなのです」

「どつから手エ付けたらいいんだこれ」

「具体的な目的地が示されてるのはフェブリクの里だけだね」

「じゃあそこへ行く?」

「うん、ベルゼブブや白い妖精のことはそこで聞けばいいだろうし」

「キャサリンは?」

「どうせラスボスだから待ってくれるでしょ」

「うーん……里の調査ってことは厄介事に巻き込まれるのかな」

「どういふ形であれ報酬は頂けるでしょ、きつと」

「それもそつか」

「……置いてけぼりにされた気分なのです。どんどん話が纏まっていくのです」

「2人とも頭いいし、らぶしいに至っては生徒会役員だからなあ」

「なるほどなのです」

「到着なのです！」

「いだって普通の人里だね」

和風というか、大正浪漫な雰囲気だ。その中にスチームパンクな造形も見られる。発
展途中の街といったところかな

「あ、もしかしてハウンドキャットの方ですか？」

「うん。ハウンドキャット39番隊カンナ班。訳あってフェブリクの里滞在しようと思ってるんだ。貴女は？」

「私はチャイ・キサラギと申します。この里に住んでいる者です」

チャイと名乗る彼女は、モブキャラにしては整った顔だと思う。身嗜みもしつかりしている

「実は、アビリティ所有者によるバトルーナメントが行われるのですが、当日の今日になって病欠者が……」

「ねえ、病欠って何人？」

「3名です」

「カンナカンナ！あたし達も参戦しようよ！」

「らぶしいさん名案なのです！我々の戦闘要員もちょうど3名なのです！」

あ、確かに

「チャイさん、いいかな？」

「はい！ありがとうございます！控え室まで案内しますね」

そうして到着した控え室は思ったよりは広かった。選手の数は私たちを含め10人程度だろうか。エージエントは他にいないようだ

「エージエントの皆さんにルールを説明しますね。タイマンによる真剣勝負です。勝利条件は相手を気絶させるか降参させるかのどちらかです。アビリティを駆使して頑張ってください。出番になったらお呼びしますね」

丁寧な子だなあ

改めて対戦相手を確認。腕っ節の強そうな人ばかりだ。女性は私達だけだし、参加するやつ間違えた感がすごくてやばい

次にトーナメント表を確認。第一試合の五試合目が私だ。対戦相手は地元の剣士らしい。らぶしいは三試合目、さあやは初戦じゃん

「さあやさん、ジエイさん、入場お願いします」

お、始まるみたいだね。ハウンドキャットのエージェントの実力、見せてやろうじゃない